
鉄の蟲篋

けっとしー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鉄の蟲籠

【Nコード】

N1767D

【作者名】

けつとしー

【あらすじ】

タクシー運転手である主人公は、この生活に限界を感じていた。未来に希望を見出せずにいた主人公に尊敬していた先輩が事故で亡くなってしまうという報告が入る。仕事に虚しさすら感じ始めた主人公に悪魔の囁きが……。

「大阪駅まで」

客は車の中に入ると同時に目的地を告げた。昨夜の酒が残っているのか、安い酒の香りとヤニの匂いが混じった口臭が運転席の私まで届けられた。

「かしこまりました」

何の感情も込めず、私はへりくだる。ここから大阪駅までワンメーターばかりであろう。最初の客がワンメーターで、臭い男だなんて今日についてない。ああ、違う、違う。ついてないのは今日だけじゃない。今までも、そしてこれからも生活に満足できるほどの幸運など自分には無いのだ。きつとそうだ……。

十四年働いた会社に捨てられたのは五年前だったであろうか。妻の役目は炊事洗濯するだけのロボットだと考えていた日々。妻の誕生日にはゴルフに行き、結婚記念日には接待で酒を飲む。薄暗い食卓で健気に待つ妻に私は感謝の言葉を発したことは無い。冷え切った料理を哀しげな目で見守る妻の気持ちを考えたことはなかった。

幸運という言葉を忘れてしまった私。最後に残ったのは皮肉にも妻の存在だった。今でも思い出す。会社に捨てられた日、薄暗い寝室で私は妻と泣きながら抱き合った。妻の体は小さくて、しかしとても暖かかった。この時私は決意したのだ。これからの私の人生を妻のために使おうと。

それなりの貯えはあったが、仕事が欲しかった。妻に苦勞をかけなくなかった。不況の煽りを受け、なかなか職が決まらなかったがなんとかタクシーの運転手に落ち着いた。タクシー業という職に就くのは本意ではなかった。給料は歩合制であったし、頑張れば旅行へ行くぐらいの金は出来ると自分を励まし、毎日を必死に生きた。前の会社の給料と比べるとだいぶ下がったが生活を維持していくと

いうことはなんとかなった。徐々に仕事に慣れ、これからだと言う時に地獄は現れた。規制緩和という地獄が。

今から三年前の2002年。改正道路運送法の施行で、「新規参入」「増車」「価格」の三つの自由化が図られ、多様なサービスが生まれるはずだった。しかし現実には、激しい安売り戦争と供給過剰が起き、私の給料は激減した。初乗り五百円タクシーや五千円を越えれば半額など様々な策が打ち出されたが調子が良かったのは最初のうち。目新しさで乗っていた客はもういない。今は少ない餌を身内で喰らいあい、仲間の体を喰らいあう。二十時間働いても、休日を返上して働いても生活はどんどん苦しくなるだけ。この世界は地獄だ。地獄以外の何物でもない。

大阪駅に着くと駅近辺の道路という道路が黄色やら緑やらのタクシーで埋め尽くされていた。もうすぐ、東京からの新幹線が到着する時間だ。また、餌を奪い合う時間になったのだ。

「改札まで少し遠いですけど大丈夫ですか？」

憂鬱さが声に現れていたのかもしれない。今日はじめての客は不愉快さを隠さずに言い放つ。

「ソウオモウナラマエマデイケヨ」

何も感じない。記号としてでしか感じられない。後ろを振り向かずじつと前を見ていると千円札を私に向かって投げつけ客は降りていった。儲けたな。私はそう思う。とても醜いだろう。金のことしか頭に無い私はとても醜いだろう。客の態度への怒りより自分の醜さが心にしみ、情けなくなった。情けなさを紛らわすように私は煙草をふかす。そして、蟻の行列のように長い、長いタクシーの列に自分の車を参加させた。

一時間ほど停車していたが、前のタクシーは動く様子を見せない。今日は動きがいつもより悪い。

「便所でも行くか」

誰ともなしに声をかけ、運転席のドアを開けつつむきながら歩き出す。

「こばやん！ 調子はどうや？」

車内で煙草を吸っていたのだろう。開かれた窓から威勢の良いダミ声と紫煙が飛び出した。

「今日はダメつすね。たっさんはどうですか？」

「あかん、あかん。お化け（長距離客）もぱったりやな」

ダミ声の主は横田辰夫。通称たっさん。バブルの時代からこの世界で飯を食っている大ベテランだ。来年に定年のベテランもこの状況の打開策は思い浮かばないらしい。

「こばやん、休憩せえへんか？」

「そうですね、流れが悪いですし。車から飯取ってきます」

今日の昼食はコンビニのパン。変に脂っぽい菓子パンをたっさんと二人で食した。

「こばやん、仕事辞めたいんか？」

パンを食べ終わり、ポケットから煙草を出そうとしていたら不意にたっさんがきりだした。そういえばいつもそうだった。新人の時も、仕事がつまうまいかなかった時もいつも優しい言葉とアドバイスをくれた。

「今はしんどいかもしれんけどな。タクシー仲間が御上と裁判すると言つとるし、もう少し頑張ってみんか」

もう私は四十歳を越えた。これから新しい職というわけにもいかない。

「わかつてるんですけどね」

頑張るだけじゃどうしようもないことがある。気持ちだけじゃ乗り越えられない山がある。それからお互いに言葉も交わさないまま、たっさんと別れた。自分の車に向かう途中、たっさんを見ると、淋しそうな目で青空に向かって昇る煙草の煙をじっと見ていた。その姿が最後に見た、たっさんの姿だった。

その日の真夜中、いつものように憂鬱な気分で車庫に戻った。自分に課した一日のノルマに達していないのがその原因だ。車の鍵を返しに行くと所内が騒々しい。

「なんかあつたんか？」

近くに居た同僚に声をかける。

「たっさん、事故起こしてもうたらしいで」

「え！ それでたっさんは！？」

「即死やってよ。お客さんは無事やったらしいけどな」

衝撃的な内容だった。たっさんは安全第一で、なおかつ仕事が速い。その仕事への姿勢が皆からの尊敬を集め、たっさん自身の自慢でもあった。

このところたっさんは休みなしで働いていた。疲れと睡眠不足から注意力が散漫になり事故を起こしたのだろうということだった。事故だけは起こしてはいけないと口すっぱく言い続けたたっさんだけにシヨックは大きかった。

お客さんがほぼ無傷だったのが、お客様の安全第一と言っていたたっさんらしくて、余計に哀しくなった。

三日後、仕事を休んでたっさんの葬式に行った。驚くほど参列者が少ない。一つの仕事にプライドを持ち、懸命に働いた人の最後の晴れ舞台がこれだとは信じたくなかった。共に行った同僚と早々と焼香を済ませ、気分を変えようかと近くの寂れた小料理屋に入る。冷めた付き出しをつまみに、妙に温いビールをあおる。タクシー運転手だからあんなに淋しい葬式なのか。大会社の社長となんの違いがあるのか。虚しくなる。人の人生にこれほどの格があることに。

「たっさんなあ、焦っとつたんやなあ」

隣の席の同僚が淋しげに言った。思えば、店に入って初めての会話だった。

「もうすぐ退職やったからなあ。嫁さんを旅行に連れってやってやいたいってずつと言ってたもんなあ」

同僚は食べたくもないお品書きをじつと眺めながらぼつりと話した。そういえば、最近のたっさんの出勤率は異常なものがあつた。そういうことだったのか。

「あれだけ働いても、旅行一つ行けへんのやなあ」
虚しい。ただ、虚しい。

葬式の次の日、またタクシーに乗る。頑張ろうなどの前向きな気分にはなれない。ひとしきり流し（道路を走りながら顧客を探す営業形態）、大阪駅で客を待つ。駅に群がるタクシーの列が蟲籠のように見える。餌を満足に与えられずに日々弱っていく私達は蟲。タクシーという籠からは抜け出せない蟲達。いつそ、ひとおもいに殺してくれ。

今日も一日のノルマを達成できなかった。休日返上で働かなければな……。タクシーから降りるのも面倒で、ハンドルにうつ伏せになつていたら窓が叩かれた。

「こばやん、あがりやろ？ 一杯、飲まへんか」

珍しく甲田が話し掛けてきた。たっさんの葬式にも行かなかつた薄情な奴。金に汚く、最低な人種。

「甲田さん俺、金無いんすよ」

「ああ、いいんや。奢つたるよ」

また、珍しい。後輩と飲みに行つてもワリカンならまだいいが、時には奢らせる甲田がこんなことを言うなんて。

「いや、でも……」

断るための言い訳を選んでいるうちに甲田が喋りだす。

「いい話があるんや。まあ、文句言わずに来い。角の飲み屋で待つとるからな」

そう言つと甲田は足早に店へと向かつていった。困つたな……。酒を酌み交わす相手は気に食わなかつたが、酔い潰れたいという欲求もある。金の心配も無さそうだし行つてみるか。

帰り支度を終え店に入ると威勢のいい声が聞こえてきた。

「おお、ここや！ こばちゃん、ここやで！」

赤ら顔の甲田が汚い手をひらひらと振った。少し、この場所に来たことを後悔する。

「まあ、生中でいいやる？ おねえちゃん、生二つな！」

甲田がこの店に入って三十分も経っていないだろう。それなのにかなり酔っている。この調子だと、いい話っていうのはくだらない甲田の思い出話か、どうでもいい自慢話に違いない。

「はい、生二つね」

運ばれてきたビールを口に注ぐ。空きつ腹にビールが注ぎ込まれ、少しいい気分になる。

「ほんでな、あつこのキャバクラの姉ちゃんがな……」

このくだらない話と目の前の小汚いオヤジが居なければもつとい気分になれるだろう。適当に相槌を打ちながらアルコールを摂取し続ける。私が七杯目のビールを頼もうとした時だった。甲田がぼろきれのように汚れたコートから携帯電話を取り出した。

「甲田さん、携帯買ったんですか」

特に興味も無かったが、話題を振ってみた。どうせ、飲み屋の女にそそのかされたのであろうが。

「ああ、これだな。副業をやつとるんや」

早く次のビールを頼みたかったが聞いてみた。

「へえ。なにやってるんですか？」

そう聞くと甲田は指をぎこちなく動かし、顔を近づけるように合図した。私は顔を近づける。

「シャブのな、運び屋やってんねん」

驚いて甲田の顔を見ると不愉快な笑みを浮かべている。

「これにな、紹介してもらたんや」

甲田は自分の頬を人差し指で斜めに撫でた。

「捕まらないんですか？」

自然と声が小さくなる。

「そんなことあらへん。簡単なもんや。月十万もろつとる」
私は静かに唾を飲み込む。ビールのことはもう頭に無い。

「どうや？　こばやんもやらんか？」

ツキジユウマンエン。大きい。大きすぎる。これで、少しは生活が楽になる。妻も少しは楽になるだろう。

でも、いいのか？　これは犯罪だ。もし捕まったら？　この後の人生はどうしたらいい。

不安と期待。交互に顔を出す。甲田が今か、今かと答えを待っている。

「返事は待つてください」

苦し紛れに私は答えた。甲田は嬉しそうに笑った。

「ああ、待つとるで」

蜘蛛が巣にかかった獲物を見て笑っているようだった。

あれからすぐに甲田とは別れた。酔いと禁じられた副業の話で火照った体を冷やしたかった。家に着き、貧弱な玄関を開け、真っ暗な寝室に入る。

「おかえりなさい」

不意に妻の声が聞こえた。もう夜が明けようかという時間に妻はまだ起きていた。今日は遅くなると電話を入れていたので寝ているものと思っていた。

「まだ起きてたのか？」

「ええ……。なんだか眠れなくて」

部屋の電気は付けていないので妻の顔は見えない。私は黙って着替えを済ませ、妻が横たわる布団に入る。こうして一つの布団で共に寝るなんて久しぶりだ。

「ねえ？」

妻の優しい声が聞こえる。

「うん？」

「私はこのままで充分幸せよ」

ぼつりと妻が言った。副業の話を知っているはずがない。

「今の貴方は近くに居てくれる。だから、焦らないで」

私は言葉が出なかった。妻に腕枕をし、そっと引き寄せる。

ふと、たっさんの言葉を思い出した。

「わしらはタクシー乗りやからな。お客様を安全に目的地まで送り届ける。これを毎日繰り返すだけでいいんや。それが自信になり、プライドになる」

私はタクシー運転手だ。そのプライドを捨てて、妻のことを言い訳にし、犯罪に手を染めろというのか。あの話は断ろう。そう決心する。隣では妻が子どものような寝息を立てている。私も徐々に深い眠りに落ちていった。

あの夜、断ると決心してから一ヶ月経った。甲田に断る旨を話した時の目が忘れられない。金以外に拠り所がある私を憎み、羨ましがるあの目を。それから、甲田とは話していない。私は黙々とお客様を運び続けた。一日のノルマも越えるようになってきた。少しずつ、少しずつだがうまくいくような気がしてきた。そんな時だった。

「こばちゃん！ 大変や！」

ある日、車庫に帰ると同僚が大騒ぎで駆け寄ってきた。

「どうしたん？ 血相変えて」

「びっくりすんなよ……。関東の会社が大阪にやってきよるんや！」
関東から新たなタクシー会社が参入してくるのだという。私達の会社より優れたサービスを携えて。前よりさらにお客を喰らいあつ。目の前が真っ暗になった。

今日も、大阪駅で客を待つ。関東の会社が来てからは歩合を得るために自腹で補填するということが多くなり貯金がみるみる減っていった。このままなら一年もたないだろう。どうすればいい？ どうすればいいんだ……。。

「こばちゃん」

乾いた声が窓の外から聞こえる。目を向けると甲田が腕をぐるぐると回し、窓をあけるように催促している。

「なんですか？」

正直、今は甲田に会いたくなかった。今の状況で副業の誘いを受けたら間違いなく誘いに乗ってしまう。

「あれ見てみいな」

甲田は五メートルほどのタクシーを指差す。そこには、やくざ風の男二人が運転手から金を受け取っていた。最近、タクシー運転手を狙ったヤミ金が増加しているということ思い出した。

「ヤミ金にひつかかったんやなあ。タクシーは現金もつとるからな。金の回収がしやすい。その日の売上を返済にまわすから、ぶっこむ（歩合を得るために自腹で補填すること）ためにまた金を借りる」

甲田は嬉しそうに私の顔を見た。

「最初はな、軽い気持ちで借りたんやろな。ぶっこむためにな。それが蟻地獄の始まり。もう、骨の髄までしゃぶられるしかないんや」
もしかしたら、あの運転手は私の姿かもしれない。そう考えてしまった。

「この間の話、やらへんか」

汗が額から溢れ出した。このままでは生活が出来なくなるんだ。妻のためなんだ。プライドなんかで飯は食えないんだ……。

「やらせてください……」

蜘蛛が巣にかかった獲物に牙を突き立てた。

副業の内容は簡単なものだった。仕事の合間に受け取った覚せい剤を運ぶ。ただそれだけ。毎日ある仕事ではないし、本業の邪魔になることはなかった。

「ご苦労さん」

そう言われながら渡される数枚のお札。総額十二万になった。しかし、妻に手渡してはいない。渡せない。

私は手に入れた汚い金で飲み歩くようになった。毎晩のように飲

み歩き、家に帰らない日もあった。自分の情けなさを紛らわすため、自分の醜さを隠すため、酒を飲み続ける。

今日は金がなくなり酒で自分を偽ることが出来なくなった。家に帰る。家に着き、貧弱な玄関を開け、真つ暗な寝室に入る。電気を付けると妻の姿がいつもと変わらずそこにいた。涙が溢れる。なにも変わらない、家と妻。変わったのは私の汚れた手と酒の量。

着替えもせず、もう一度外に出る。結局、何も変わらない日々。僅かな金のために罪を犯し、僅かな金を自分の欲望のために使う。どこをどうやって歩いたか分からない。目の前に大通りが横たわる。大型のトラックが猛スピードで迫ってくる。私は道路に飛び出す。眩しいライトが近づいてくる。

ごめんな。迷惑ばかりかけて。淋しい思いばかりさせて。

もう疲れたんだ。君を言い訳にして、酒に逃げる生活に。

でも、でもな。君を幸せにしたい気持ちは嘘じゃなかった。

運転手の仕事も好きだった。

ただ……。ただ……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1767d/>

鉄の蟲籠

2010年10月8日15時42分発行